

お兼の心を充分了解して居るからにやア、那樣何にもならぬやうな事アしたかアねえ。」

「ア其處だて、其處がね、」

「其處も何もありアしません。改まつて出りやア、此子は最う私共の子ぢやアねえのです。其方のものは其方で仕末するが可いぢやありませんか。」

「そりやアお前さん自分の腹でいふんだらうが、」

「なに私の腹ぢやアねえ。」

「まアさ。それぢやア事が治まらねえ。私も斯うやつて態々来たもんだから、お前さんもまア些少アそこん處を買つてくれて、ね、それにまア何を言ふにも子供の事だから、」

言はせも果てなかつた。堪へきれぬやうに荒々しく、

「ちよッ、いつまで那樣事を並べて居なさるんだい。私ア最う聞いちやア居られねえ。お前さん分りきつてる事を最う文句は要らねえぢやねえか。」

私の方ぢやア何うしたつて請取らねえから然う思つておくんなせえ。」

七

お谷の前に、お鈴は人形のやうに着飾られて、結立の唐人鬘に燃立つやうな緋鹿子を掛けて、紅白の房の下つた、蝶に牡丹の、花簪の色を盛上げて、顔が首から、眞白に塗盡されて、見るから美しい愛らしい姿で坐つて居た。今日は此家へ連れられて来てから丁度四日目で、お谷は其間、殆んどお鈴の事にばかり掛かつて居た。愚に返つて、

「おのね、ほら、先刻お言ひだつたらう、あのう、今度先の母様が田舎から歸つて来たら屹度連れて行つて遣るつて、私ね、其時にはね、此着物と、此帯と、此帯揚と、それから、此簪として、此裂を掛けて行かうと思ふの。」

「おや、として何うするの。」

「そしてね、あのう、これは、伯母さんぢやなかつたつて今度の母様に、皆貰つたんだよつて言つて見せて遣るの。」

「おやまア。然うしたら先の母様は何て言ふだらう。」

「屹度ね、おや、好いんだねえつて言ふわ。」

「おほ、まア、お前は聲色が上手だねえ。」

「そいからね、私はね、あのう、い、母様だから、私すつかり好きになつちやつたよつて言ふわ。」

「本當に。」

「然、本當に、だつて然うだもの。」

「可愛い、ねえ。」

融けて流れて、平な處は、風のない時は、石のないまでは、水は鏡のやうであつた。お谷のやうな質の人を今よく味つて見る危さを、半年ばかり過ぎての結果が明らかにほこして見せた。それよりも尙、意外な事は、一年ほど経つてから、お谷が酸い物を好み出したのである。お鈴は何も知らぬ

子供になつて、あやしたり、そやしたり、少しも早く懐かせやうと思つて、手を盡して氣に入るやうな事をして見せた。流石子供で馴染むのも早く、いろ／＼面白い事に氣も移つて、お鈴は最早泣通しにもせず、折節に思出しては、急にしゃくり上げるが、其涙も漸くに減つて来た。お谷は始終傍に付切りで、目を細くして、さも樂しうに、飽きもせず相手になつて、時の移るのも知らずに居る。

「然うお。」
とお鈴はあせげなく言つて、前のやうに面を振上げて居た。お谷はひつたり其顔を打目成つて、
「お前は？」
「え、私。」
とばかりで、お鈴は笑つて何も言はなかつた。
「言つて御覽、甚だ事言つたつて構やしないか。」
「でも可笑しいもの。」
「可いぢやないか。言つて御覽よ。」
お鈴は黙つて、小さな胸に何を思つて居るのか、言得ぬやうに伏目になつて笑顔を隠して居たが、再び促されて、やがての事に何を言ふかと思へば、
「あのお、私はね、矢張り好きよ。」
「おほ、まア、それぢやア早く言へば可いのに、何故黙つて居たの。」
「だつて何だもの。」
「何なの。」
「何だか知らない。」
「おほ、まア、可笑しい兒だねえ。」
お鈴も共に、意味もなく笑つたが、不圖思付いたやうに、
「あ、伯母さん、」
「あれ伯母さんて言ふんぢやないよ。最う忘れたの。」
「あ、然う然う、母様。」
「あ、いよ、何だぞ。」

日露戦争 西伯利亞鐵道

露國 サマロフ 著
日本 中内蝶二 譯

第一回 金州城

わが友静翠子、去夏西伯利亞に遊びハバロフカの一農家より奇書を得て歸る。予が讀者に紹介せんとするは、即ち其書の一部分なり。

頃、明治廿八年二月中旬のことなり。東洋の天に煙硝臭き雲を漲らし、日清戦争も、はや終局に近づきて、さしも清國政府の要領とたのみたる威海衛も陥落して、北洋艦隊悉く日本の所有に歸せし日の翌日、第二軍に從つて金州の城内にありし日本の通譯官眞島秀之進は、夜に紛れて廳然營中を去り、何地に行きけん絶えて消息もあらざりけり。

雪は露營に満ちて春なほ寒き金州の城内、天幕の中に焚火ながら、額をうつめて何事かを語らへる三人の壯漢、髪も衣裳も同じく支那風の扮装なれど、心は赤き山櫻の、まことは日本の通譯官なり。

甲「のう近藤、眞島といふ男は随分奇人ぢやないか。戦は既に我國の勝利に歸して、いざ凱旋となつた今日に、のそ／＼何處へ出かけて行つたのかしら。」

乙「さア我輩もそのことが不審で堪へられない。この第二軍の方で偵察を勤めたものも少くはないが、一番功を顯したのはあの男ぢや。遠く大元帥陛下の御聽にまで達した位だから、大本營へ歸つた曉には、屹度難有いお言葉を戴くに

「然うお。」
とお鈴はあせげなく言つて、前のやうに面を振上げて居た。お谷はひつたり其顔を打目成つて、
「お前は？」
「え、私。」
とばかりで、お鈴は笑つて何も言はなかつた。
「言つて御覽、甚だ事言つたつて構やしないか。」
「でも可笑しいもの。」
「可いぢやないか。言つて御覽よ。」
お鈴は黙つて、小さな胸に何を思つて居るのか、言得ぬやうに伏目になつて笑顔を隠して居たが、再び促されて、やがての事に何を言ふかと思へば、
「あのお、私はね、矢張り好きよ。」
「おほ、まア、それぢやア早く言へば可いのに、何故黙つて居たの。」
「だつて何だもの。」
「何なの。」
「何だか知らない。」
「おほ、まア、可笑しい兒だねえ。」
お鈴も共に、意味もなく笑つたが、不圖思付いたやうに、
「あ、伯母さん、」
「あれ伯母さんて言ふんぢやないよ。最う忘れたの。」
「あ、然う然う、母様。」
「あ、いよ、何だぞ。」

違ひない中將閣下も話して居られた。それなのに、今になつて遽に姿を隠すとは何うしたことだ。我輩眞島のために惜しまざるを得ずだ。

丙「いや待てよ。もしかすると眞島はあの晩何か調品に出かけた途で、はからずちやんの奴に取巻かれて、やられたんぢやあるまいか。」

甲「何うして、眞島は其様な弱い男ぢやない。君等は未だ聞いて居ないか知らぬが、僕は思ひ當ることがある。外でもないが、あの男が従軍する以前には、暫く浦鹽斯德に居つたといふ話だ。そこに何でも可愛い情婦がある様子さ。あんな奇人だもんだから、逢いたいと思ひ出したら、もう矢も楯もたまるまいよ。大方そんなことが原因になつて居るだらうぞ。考へもするが。」

乙「馬鹿いひたまへ、眞島は決して、一婦人の愛にひかされて、國家の大事を省みないやうな、其様な卑劣な根性の男ぢやない。支那の奴等なら知らぬこと、苟も日本男子と生れたるもの、中に、そんな男は一人も無いと我輩は保證する。」

丙「ヒヤ、」

恰もこの時、天幕の外に雪を踏む靴の音靜かに響きて、
「や、相變らず賑かぢやな」と中を覗きたる將官あり。

甲「通譯官やア、これは中將閣下、實は只今も眞島の噂で、互に騒いで居りました所でございませう。」

中將は笑まじげに鬚をひねりて、
中將「は、アさうか、我輩も其事で君達に話さう

と思つて来たのちやが、實は今眞島の所から消

息があつたよ

甲通譯官「エ、消息が、あの眞島から」

乙通譯官「閣下、何處からでございますか」

中將は當惑の色を現はして、

「何處からとも書いてないのちやから。まア見る

が可い、此ういふ文言ぢや」

と衣囊の中より一通の書簡を取り出して三人に示し

ぬ。三人の通譯官が眼は等しく此手紙の面に注

がれて、額と額と相接せんばかりなり。

甲通譯官「まア待ちたまへ、さう頭を持つて來られ

ちやア困るぢやないか。今僕が讀み上げるから静

かにして聞きたまへ」

乙「謹聴々々」

甲通譯官「しッ、閣下の前だ、静に」

甲通譯官が讀みあげたる眞島よりの書簡といふ

は、次の如き文言にて、極めて漠然たる認めかた

なり。

（上皇皇軍大提。威海衛も既に陥落し、北京政

府は恐慌のあまり、急ぎ媾和の使を我國に派遣

せん模様候へば、愚生等が任務をつくすべき

時期は、最早終に近づきたるものと推察仕候。

愚生こと兼てより一大希望を胸裡に貯へ、一日

もはやく之が實行に着手せむと時機を相待ち居

り候處、幸に今日其時機に際會致し候ま、突

然陣中を退き申候。其大希望と申すも、唯國家

の爲に盡さむとする一片の赤心に外ならず候得

共、其儀は茲に陳述致さす候とも、幸に成就し

たる曉には、自から世に表はれ申す可くと存

候。先づそれまでは、徒に大言放語と嘲けられ

むことの口惜しく候間、暫らく秘密に致し置候、

鳴つてたまたねえ

丙夜廻「エエ、また何時もの癖を始めやがったな。

貴様の様な意地の穢ねえ奴アありやアしねえ」

甲夜廻「時に旅の方、お前何方から来たのかい」

旅商人「へえ私ですか。私は金州の方から参りました、何うもその彼方の方では、倭奴が澤山入り

込むやアがって、狼藉をしゃがるもんですから、私等の家は九で滅茶々さ。で、女房も

たいてい、閣下の許可を俟たずして、狼りに軍

中を去り候罪は、死よりも重きものと自からも

覺悟致居候、乍併、年來の希望を達すべき好機

會を逸せむことの遺憾に候ま、罪ど知りつゝ、

罪を犯し候、只此上の御願には、閣下が寛仁なる

御處置を以て、愚生が命は少時愚生へ御預け被

下度候云々

第二回 旅商人

そも愛理城と聞てえしは、滿州の北境にありて、

西伯利亞との間を流れたる黒龍江の右岸に沿ひ、

露領伯拉照一夫一孛斯科と對ひ合うたる小都會

なり。

春の夜なれど雪空の風寒く、身体の骨ばね水の刃

もて削らるゝが如き真夜中過ぎ、とある大厦の軒

下に、形ばかりなる外圍を繞らして、板屋根に雪

を防ぎし火の番小屋、燐燐に火を起して、臭き香

の濁酒を酌んで寒さを凌ぎ居れる夜廻共を驚しつ

つ、ニユツと面現はし、旅商人あり。

旅商人「皆の衆、この寒さに御苦勞でございます。

へ、私は夜更けて宿を取りはづし、非常難澁

致して居るのでございませうが、御厄介様ではご

ざいませうが、何卒少時休ませては下されませ

まいか。實のところ、この通り足も手も凍つち

まつて一寸も歩行かれませんで、へえ」

甲夜廻「それは囁困つたらう、構うこたアねえ、さ

アサツと這入つて、悠々暖まつて行かつしや

」

乙夜廻「待て、さう貴様のやうに容易うは入れ

られねえ、また御役人様に發見つて見ろ、何時

もこの通りお目玉頂戴は難有くも無え話さ、なア

兄貴」

は、歸るにも歸られず、可愛相にべんかいて降

参しやがったて云ふぢやアねえか。大概に虚言

つきなせえ」

おはれ我住む國の危急存亡の秋に會したりとも知

らで、賄賂を懐にするより外には、何一つ爲すこ

ともなき市廳の官吏等が放言を信じて、かく太平

丙夜廻「さうとも、こりやア考へもんだな

意味ありげなる夜廻等が言葉に、旅商人は早くも

それと推したりけむ。懐中より財布取り出して、

何はどかの錢を紙にひねりて、

旅商人「親方、こりやア、ホンの些少ばかりござ

います、御酒の添錢になりと爲て下さり」

と聞くより夜廻等は頭を掻き、嬉しげなる相好を

強ひて繕ひつ、

乙夜廻「其様な心配を掛けちやア氣の毒だか、なア

兄貴、折角のことだから貰つて置くとしやうか

なア」

丙夜廻「左様さなア、志を無にするのも、なんだか

其可笑しなもんだし……ま、旅の方サツと此方

へ、爐の側で一杯遣りねえ」

藥の効顯著しく、俄に變りし夜廻等が追従口に、旅

商人は微笑みながら内に入りて火の側に足投げ出

しぬ。

乙夜廻「袖の振合も他生の縁といふことが有らア、

まア一杯呑みねえ」

旅商人「これは難有い、お蔭で寒さが凌がれるとい

ふものだ、あアもう澤山、實はその酒は餘り飲

ねえ方でへ」と一口にぐツと呑み干し」この

甘さといふものが、何うも腸へしみこむ様だ、

ハ、ハ、ハ」

丙夜廻「ま、重ねなさい、今入三盃といふことがあ

らア。二三杯續け呑みにぐツと引つかけるてい

ふと、其寒さも何も何處かへ失せて了やがるか

ら可笑しいやハ、ハ、ハ」

丁夜廻「オイ、兄貴、ちツと己れの方へも杯を廻

はしねえな。手前等ばかりで飲んで居たつて糞

面白くもねえや。先刻から咽喉がもうグウ、

ウ」

肩に負ひたる荷物をはずし、布呂敷を解きて抽斗

多き箱の前に現はし、ニツ三ツ引き出して前に押

しならべぬ

丁夜廻「ヤア素破らしい根掛があらア」

乙夜廻「こつ其穢い指でいちぢくするなア廢せ、見ろ

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

が、何でも去月の中旬だつたとか、黃海で大戰

争が起つて、丁將軍は日本の軍艦を悉皆打ち沈

めて了つたもんだから、陸地の方の日本の兵隊

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

が、何でも去月の中旬だつたとか、黃海で大戰

争が起つて、丁將軍は日本の軍艦を悉皆打ち沈

めて了つたもんだから、陸地の方の日本の兵隊

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

が、何でも去月の中旬だつたとか、黃海で大戰

争が起つて、丁將軍は日本の軍艦を悉皆打ち沈

めて了つたもんだから、陸地の方の日本の兵隊

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

が、何でも去月の中旬だつたとか、黃海で大戰

争が起つて、丁將軍は日本の軍艦を悉皆打ち沈

めて了つたもんだから、陸地の方の日本の兵隊

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

が、何でも去月の中旬だつたとか、黃海で大戰

争が起つて、丁將軍は日本の軍艦を悉皆打ち沈

めて了つたもんだから、陸地の方の日本の兵隊

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

が、何でも去月の中旬だつたとか、黃海で大戰

争が起つて、丁將軍は日本の軍艦を悉皆打ち沈

めて了つたもんだから、陸地の方の日本の兵隊

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

が、何でも去月の中旬だつたとか、黃海で大戰

争が起つて、丁將軍は日本の軍艦を悉皆打ち沈

めて了つたもんだから、陸地の方の日本の兵隊

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

が、何でも去月の中旬だつたとか、黃海で大戰

争が起つて、丁將軍は日本の軍艦を悉皆打ち沈

めて了つたもんだから、陸地の方の日本の兵隊

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

が、何でも去月の中旬だつたとか、黃海で大戰

争が起つて、丁將軍は日本の軍艦を悉皆打ち沈

めて了つたもんだから、陸地の方の日本の兵隊

甲夜廻「今日も市廳の御役人の話でえのを聞いた

第三回 滿州騎兵

洲騎兵てえのでございませぬ。甲夜廻「まつたく」と聞きたる旅商人の目はギョリと異しき光を放ちて、顔色忽ち青うなりぬ。

此旅商人も何者ぞ。滿州騎兵と聞いて 何が故にかくは驚きたる。夏々たる馬蹄の音は益近うなりぬ。旅商人は身を縮めて、成る可く火光の届かざる處に身を隠し、騎兵の此處を駆け通らんことを祈れるさまなり。

旅商人「へえ、私は小間物を荷い歩く旅商人でございませぬ。騎兵「住所は」旅商人「金州城内のものでございませぬ。騎兵「虚言を申すな」旅商人「決して虚言など申す男ではございませぬ」

に相違ございませぬ。この者どもにお尋ね下さつてもわかりませぬ。なア親方」と夜廻もを顧みて目配せすれば、根掛、簪の贈物の効能は此處にあらはれて、

甲夜廻「旦那様、この商人は私共の知己の者で毎年春から夏にかけて此邊へ商賣に参るものでございませぬ。日本の間諜など、決して其様な迂散な者ではございませぬ」と巧に辻褄合はし、夜廻が言葉に、騎兵は怪訝の眉を擡ませ、

旅商人「へえ、この荷物は商賣物ばかりで、別にその、怪しいものではございませぬ。騎兵「だまれ、怪しいものでなくば、何故早く見せないのだ。解け」と叱りつけられ、

手を止めたり。旅商人はやれ嬉しやと眉を開きし間もあらせず、騎兵は再び思ひつきたるさまにて、残れる抽斗に手を觸れんとす。旅商人も今は一生懸命にて、

旅商人「ア、もし旦那様、其れは最うお檢めなくとも同じことではございませぬ」と言葉をはさみぬ。隠し留むることを愈よ訝しけれど、騎兵は矢庭に一つの抽斗を引き出だすに、中には銀塊満ちたる。側に見る目の夜廻等は勿論、闇魔の如く面影を隠し、

旅商人「旅の方か、可いねえ、いけねえ、近頃政府から厳しいお觸がまはつて、夜に入つて旅の者を泊めることなんねえちうこつた。泊めることなんねえ」

添が無からうもんなら、全然倭奴と見られるところだつた。やれ、剣呑だ、うっかり爲て居て、また他の奴等に疑れちやア眞實にやりきれねえや。とれ、今の間に掛けるとまませう」と獨言しながら荷物を片付けて背に負ひ、

第四回 吹雪

夜の明くるには未だ間もあれど、一たび滿州騎兵の爲めに怪しの者と睨まれしからには、是より前方の旅の道、安穩に通らんと思ひもよらぬ。片時もはやく毒蛇の口を避けざれば、わが運命は覺束なし、西伯利亞の國境までは、僅に一里にも足らずと聞くものを、かの黒龍江をさへ對岸に渡りて、露西亞の領土に足踏み入れなば、最早患ふる所もあらじ、日の出ぬ前に如何にもして、

はげしかれどは祈らねど、土地凍る西伯利亞が原を吹きまくり来る北極風の、寒威厳しく、勢ひ烈しく、吹雪となつて前面より襲ふに、笠傾けて歩むとせれば、目、鼻、口の容赦なく顔一面に舞ひかゝり、我が行く方の道は埋れて見え辨かず、呼吸さへ出来ぬ苦しさに、旅商人は困り果て「この勢ひぢやア、河を渡るこたア覺束ない。と云つたところで、街へ引返す譯にもゆかず。何處ツか此邊に渡船小舎でも有りさうなもんぢやア」と嘆息を洩らしつ。とても此大雪を冒して進まんことの覺束なければ、何處にてもあれ人家あらば、其處に一夜の宿を借らんと、四邊を凝乎と視廻はせども、黒白も辨かぬ暗夜といひ、殊には吹雪に隔てられて、咫尺の間も辨じ難し。さりとて此儘に立ちすくまんには、凍えて死ぬるより外に術もなければ、勇氣を鼓して進み行く内、嬉しや一町ばかりも来て、一軒の人家を見出してけり。

主人「何方かい」旅商人「へえ、私ですわ、私は旅商人でございませぬ。生憎の大雪で、道を失つて困つて居るのでございませぬが、何卒暫らく休ませて下さいますまいか」

と覺しく、ハタと手を拍ちて「あ、さうだつた、お前さん可いこと教へて上げるよ。此小舎の横手から左の方へ何處までも眞直に行きなさいとね、竹林寺といふ古寺があらア、其處へ行つて頼んで見なすつたら、泊めてくれんにも限るめえ」と親切なる主人が言葉、思へばかなき依頼にはあれど、何時までも斯くてあるべきにあらねば、旅商人も教へらるゝまゝに尋ねて見んと思ひ「成程、此方様では泊められないと仰しやるものを、何時までも斯うして居ても詰まりませぬ。そいぢやア兎も角其お寺へ行つて願つて見ませう、これから、まだ餘程あるのでございませうか」

主人「なに、五町には足りましねえよ、晝だ此處から能く見えるんだだけ、この道を行きなさいりやア間違つたアありやアしねえ。あ、最早行きなさいるか、道が狭いから田圃へ落ちねえやうに氣をつけて行きなせえよ」 (未完)

初笑ひ

はやり 露 伴

世にはやるといふことを見聞くに、道々しきにも、藝能にも、よき事のみ行はるゝにはあらで、おほかた爲し易く學びやすき事のまづはやるなり、と上田餘齋が云ふたはあもしろい、妻帯を免したので眞宗ははやり、俗言を嫌はぬので俳諧ははやつたのだ、ほんに、良き事のみ行はるゝにはあらで、おほかた爲し易く學びやすき事のまづはやるなりぢや、と先生仔細らしく語り玉へば、塾

生横手を拍つて感心し、道理で油揚げ焼がはやります。

のぞみ

のら息子の太郎次郎むだ話の末、おれが金持になつたら、先づ西洋館を建て、暖爐を備へ込み、三度三度西洋料理を喰べて、マニラの太巻煙草を喫し、天氣の好い時は、佛蘭西出来ダマスカスパールルの喜鵲頭二連銃を肩にして、純粋スニーカーを牽きつれ、従者を隨へて遊獵と出掛けると、太郎が云へば、次郎も負けぬ氣になつて、わたしが金持になれば、童子か國府津へ物數奇な別荘をこしらへて、器物萬端大濫の底のたりを極め、そして客でもする時は、新橋柳橋の一拉撰を下女にして使つて、風呂の火までも焚かせるといふやうなことをする、と云ふ。猶際限なくさまゝの太平樂を互に云ひ合ひ居たりしが、不圖座敷の隅に小くなり居たる親父を見つけ、兄弟右左より、父様が金持になつたらば、と問へば、親父、おれかえ、左様さ、懷爐灰を二分がとこも買て置かう。

りづめ

聞き囁りに法律を少しおぼえたる理髮店の主人、客の鬚を剃りながら、おまへさんは寄席で手品をつかつて御視せなさる奇天齋さんだね、一体手品といふものは、有るものを無いと見せたり、無いものを有ると見せたりして金銭を取るもの故、おまへさんの爲ることは詐偽取財だと云はれても仕方ありません、客大きに怒つて、なんだ、乃公の爲る術が詐偽取財ならば、汝が職は持兇器強盗だ、と遣り返す。途端に頸をちよいと切られて、あいた、此畜生、殺人罪、殺人罪。

うたがひ

客は五十を越した通人と三十代の紳士と、妓は四十恰好の大姐とまだ二十にならぬ美しいのどの一塵にて、べんども云はせずにおもしろく飲む中、通人少し酔がまはりて、例のむかしびあきを云ひ出し、當世をくさす。オイお蝶、なんと世の中は段々わからなくなつて來るぢやあねえか、藝妓なんてへものも此節のめそつこと來ちやあ悲しい、此間もよそで笑つたが、何とかいふ當時の流行妓が、上流へといふ寸法になつて屋根舟へ入るといふ段取りに、棧橋まで來たところは強氣に好かつたが、それから怖かなさうに這ひ込んださうだせ、田舎の婆さんが杖と草履を片手に持つて一錢蒸汽へでも入りは仕めえし、藝妓どもあらうものが這ひ込むたあ情無えぢやあ無えか、その這ひ込んだ背後つきを見たらまるで伊呂波がたるの頭かくして尻かくさすと云ふもんだつたらう、と高笑ひすれば、大姐も少し笑ひ出して、ほんとにねえ、と挨拶する、若いのは不思議さうに聞き居たりしが、そつと袖を引いて微かな聲して、だつて姐々お尻から入れや仕ますまい。

すのりやう

いづれも世に名ある數寄者ども集まりて、互に鼻をうごめかしながらさまゝの物語りをなし居るところへ、これもたゞものならぬ道具屋尋ね來りて、異つたものを掘り出してまゐりました、皆様御覽下されませ、これは光琳が着ましたものぢやうさうで、しかも傳來の筋道がたしかでござりまするだけ宜からうかと存じます、と云ひながら風呂敷包みを出せば、皆々打寄りて披き見るに、いかにも結構なる白練の小袖にて、其左の袖は、墨

緑青金泥銀泥など何といふこと無くなすりのけたる痕も云はれぬ色をなせり。成程氣象勝れし人の無造作に畫筆を拭ひたるさま見えて面白し、と孰も我欲しげなる様子なりしが、やがて入札といふことに定まりて、互に人の顔を覗ひあひつ、各々小紙に思はくを書き、一と捻りして有合はせたる短冊箱に入る。さて開札となりて一番に伊川といふ男のを開けば七圓五十錢とあり。これは辛いと云ひながら二番のを見れば八圓五十五錢、三番波堂は九圓、四番仁阿彌は八圓五十錢、五番は十圓保庵と注されたり。残れる皿齋登園いづれ劣らぬ好事辦なれば、人々も大方はまづ此の二人の相摸なるべきが勝負如何あらんと見る中一つの札を開けば、十二圓一錢皿齋とあり。十二圓と値を指して、さて一錢と加へたるは素人の考への及ばぬ沙汰なり、黒い事と皆々手を拍ちしが、猶登園の札こそ見たけれど開きて見れば此品望み無し、たいなら貫はふ。

仕入帳(二)

緑 雨

初めは何なき筆のすさみ、かくも嗣次に用すべき心ならねば、當坐ばかりのおぼえ帳とわれの題したるより、漫録めきたるものに帳の字を附すること、さてはこの體裁に模すること、其後の流行となりぬ。下は團々珍聞、別世界にまで及ぼせるに、些しは厭のさゝぬにあらねど、全國到處に出店ありと思へば、それもよし、これも吉野紙の見え透きて、税さへかゝらずば眞似は當世なり。われのは一わたりの理を具したりと、猥りに帳面の

裏を明けて言はぬが花籃、それもやつぱりよしの吉野、雲か霞か紛らはしき暖簾名の奪はるゝことありとも、遂に實は奪はれぬ老舖の株を、これに誇らんも大人氣なかるべし。ひかへ帳、日記帳、何れも歳と共に改むるを例としたれば、明治三十三年一月吉日、今度の仕入帳といふ、開えの商ひ臭しと、笑ふ門には讀下りてまろめし反古に、手をふくや來たらん。もとより三餘のいたづらに、東京は日本橋區本町に送り込めば、忽ち何歎になるは瀧の水、日は照るとも絶えず判取帳に加はりて、とくく立てやたつか弓の、春はめでたし、文運めでたし、常人殊にめでたき是れも御祝儀なれば、口調の亂れは舞の常とゆるしたまへ。何のその男は裸百貫の山がへりの蹄を、さる殿のしげくと看入り給ひて、いかなる事の脚色をと問はせられし由は、骨て物の端にわれの書留めしと覺ゆ。若い衆が大山へ參詣の歸り路に御坐りますると言上ぐれば、其大山へは何里ほある。大凡そ四十里も御坐りませうか。さて、長道の道中、あの體爲では、定めし日數が掛つたであらうな。

遠く海外に遊ぶといへば、眞にこれは遊びなりける侯爵家の養子、何一つ齋らしたまはず、歸朝の後には能の太鼓に屈託なき身を打込みて、流石牙えたる機音の天下極めて長閑なることなりしが、一段くだりて伯爵なれども實父君の許へ、月三回の御機嫌伺ひ、必らず馬車にはその備へられたり。自慢なれば聴かぬも悪かるべしと此方はおもひ、所望なれば打たぬも悪かるべしと此方はおもひて、兩迷惑を令持等は知れども諫むべき言葉もなく、其儘に過ぎしに侯爵は度毎傍人を顧みて、あ、又打たねばならぬかの。伯爵も亦傍人を顧み

て、あ、又聴かねばならぬかの。斯くして子の君は親の君の歿らるゝ迄、さりとて難有き志の論ることなかりき。

●能の太鼓は末坐のものなり。少かにこれを習ひ得たる子爵殿の、素人狎覽めて自邸の催しこそ、様太く異りたれ。彼等皆平民の子なればと、おのれ一人佃敷かせて、いつも上座へ。

●人はわが前に來りて、辭儀する器械と心得し大名氣質の、今尙脱けぬも歸古稀を過ぎし御隠居とあれば是非も無し。途上に行遇ひし人の頭低ぐるを、こよなくも悦び居られしが、或時よそを我れのと誤りて、誰ぢや誰ぢやと供の者に問はるゝに、ぞんじませぬと言へば、されど辭儀したであらうか。違ひます。違ふてもよい、疾く逐駈けて名を聞いて參れ。

●使より戻りし家従が車代の、それよ三錢と渡したるが目につきて、何日何處の御運動にも、參りませうと客待の勸むれば、三錢か三錢か。

●四位殿の獨歩きを遊ばさねば、絶えて紙入にお手の懸かることなけれど、萬一の用意と百圓札一枚、お側の者の入れ置きしに、そつくり折目のまゝを八年程経て、圖らずも檢らればうつくしく裂け居たる事と、他のこれも四位殿が當國許の買物に持合せは同じく百圓札一枚、ハタと小商人の刺錢につかへて、餘儀なくお断りを申したる事とは殆んど同時の談柄なりしが、今一人の殿の急に出納方をお居間に召びたまひて、この手文庫のはいつ入れたか。昨年お祝の節とぞんじませう。何とや昨年、左様な古物を用ひらるゝかと、束になりたる拾圓紙幣投げ出しながら、捨てたがよからう。

●御家政改革の矢先、純金の巻煙草入をお眺へに